喉 頭 腺 癌 3 例

小池 聰之・小河原利彰*・森脇 昭介**

青木 輝行・渡辺 周一***

Three Cases of Adenocarcinoma of the Larynx

Satoshi Koike, Toshiaki Ogawara and Shosuke Moriwaki

(Matsuyama National Hosp.)

Teruyuki Aoki and Shuichi Watanabe

(Okayama Univ.)

Among three cases of adenocarcinoma of the larynx, there was one case of adenoid cystic carcinoma (70 year-old, female) and two cases of mucoepidermoid carcinoma (64 year-old, male and 45 year-old, male).

Adenoid cystic carcinoma and mucoepidermoid carcinoma arise from the submucosal mucous gland, histogenetically. Such had a transitional pattern in our case (No. 2). Mucoepidermoid carcinoma arose from the main duct and the other was from the peripheral duct near the acinal gland.

Surgical treatment was carried out as the response to radiotherapy was poor. As macroscopic observations often present difficulties, the area to be excised should be determined after examination of the frozen section.

は じ め に

喉頭では、声帯以外の粘膜は線毛円柱上皮であり、分泌腺由来も含めて腺癌発生の可能性は、他臓器のそれに比しもっと経験としてしかるべきだが、現実には喉頭癌のほとんどは扁平上皮癌であり、喉頭腺癌の発生率は全喉頭癌の1%以下である。我々が調べた限りでは、本邦においては6例²⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾が報告されているにすぎない。我々が経験した喉頭腺癌3症例について、臨床的および病理学的に検討し報告する。

症 例

症例 I : ████████, 70才, 女性

初診; 昭和52年1月13日

*国立松山病院耳鼻咽喉科

**国立松山病院研究検査科 (院長: 三木直二)

***岡山大学医学部耳鼻咽喉科学教室 (主任: 小倉義郎教授)

主訴；嗄声，呼吸困難

既往歴；高血圧症にて治療中

家族歴；特記すべきことなし

現病歴；5年前より時々嗄声を自覚していたが，近くの内科医で吸入等の治療を受けると軽快していた．今回，昭和51年10月頃より同様の症状で吸入療法を受けるも回復しないため，耳鼻科医を受診し，当院を紹介されて来院する．

入院時所見および経過；喉頭鏡検査を行うと，左声帯から左声門下腔にアズキ大のポリープ様腫瘍が観察された．左声帯運動も少し制限されており，呼吸困難を訴えるため緊急入院し気管切開を行った．左声門腫瘍よりの組織検査の結果，adenoid cystic carcinoma の所見を呈していた．頸部リンパ節は触知せず，胸部X線にも異常を認めなかった．昭和52年1月25日喉頭全摘を行った．

摘出喉頭は，肉眼的に明白な腫瘍形成は認められず，気管側断端までびまん性に浮腫状肥厚と硬化をみ，腫瘍の気管側への浸潤範囲決定に苦慮したが結局第3気管輪で気管を切断した．病理組織診断では，腫瘍は気管側断端部まで粘膜下に浸潤しており，腫瘍の取り残しを思わせしたが，手術後，経過良好で昭和52年2月26日退院した．外来通院で経過観察中であるが，局所再発，遠隔転移もなく，頸部リンパ節も触知せず経過良好である．

症例Ⅱ： 64才，男性

初診；昭和50年3月5日

主訴；嗄声，呼吸困難，嚥下障害

既往歴；20才頃より気管支喘息にて治療中

家族歴；特記すべきことなし

現病歴；約6ヶ月前より，嗄声，咳嗽が強くなり，一週間前から血痰を混じる様になったため内科医より紹介されて来院する．

入院時所見および経過；喉頭鏡検査を行うと，喉頭内腔は壊死状物質に被われた腫瘍が充満しており，軽度の呼吸困難を訴えていた．入院時の組織検査では，壊死状物質のみで診断不能であった．再度，組織検査を行ったところ，

undiff. epidermoid carcinoma の像であった．

第2回目の組織検査時，腫瘍を大きく採取したため呼吸困難はなくなった．そのため気管切開を行うことなく，昭和50年3月10日より昭和50年4月27日まで6000 rad 照射した．2000 rad 照射時，喉頭内腔を満していた腫瘍は半分の大きさに縮少し，右声帯運動は観察出来る様になったが，左声帯はまだ観察出来なかった．3400 rad 照射時，喉頭蓋の喉頭面に少し腫瘍が残存するのみで両声帯の運動はほぼ正常となった．5800 rad 照射時，喉頭内には全く腫瘍は認められなくなり軽快退院した．

退院後，外来通院で経過観察中であったが，昭和50年11月20日呼吸困難強くなり気管切開を行った．この際，旁気管リンパ節の組織検査ではmucoepidermoid carcinoma の所見がみられた．この時の喉頭鏡所見は，明白な腫瘍の再発は認められなかったが，喉頭内腔は著しく浮腫状で，両声帯の運動は著しく制限されていた．悪液質のため，昭和51年2月12日死亡した．

剖検所見；前頸部に気管切開創を有し，両側頸部にかけてびまん性の硬化をみる．両側腋窩部に示指頭大のリンパ節腫脹がある．

頸部臓器とくに喉頭は，高度浮腫状でほとんど閉塞している．声帯，仮声帯に浅い潰瘍をみ，喉頭蓋は短縮し，気管上部までびまん性に硬化肥厚し腫瘍の浸潤境界は不明である．

組織学的に，原発巣は主として未分化扁平上皮癌の所見であるが，部分的に分泌像を認めmucoepidermoid carcinoma の像を呈し，喉頭蓋から気管切開部までびまん性に浸潤する．頸部臓器一扁桃，甲状腺には直接浸潤し，両肺には粟粒大，肝には粟粒大～米粒大，その他顕微鏡的に，心，副腎，胸骨，腰椎にも血行性転移をみる．また，全身のほとんどのリンパ節にも転移あり，後腹膜のそれは拇指大となり，周囲組織にも浸潤する．

組織学的に転移巣は粘液分泌が強く，粘液細胞癌(mucous carcinoma)の所見が優勢で，

原発巣とはかなり異った組織像を呈している。

症例Ⅲ：渡○時○，45才，男性

初診：昭和43年12月24日

主訴：嗄声

既往歴；特記すべきことなし

家族歴；特記すべきことなし

現病歴；約8ヶ月前より嗄声あり，吸入療法を受けるも回復しないため精査を希望して来院する。

局所所見および経過；喉頭鏡検査を行うと，

右声帯から右仮声帯にかけてアズキ大の腫瘤形成がみられた。組織検査の結果，mucoepidermoid carcinoma であった。喉頭全摘を拒否するため，昭和43年12月27日より昭和44年2月7日まで放射線療法を6000 rad 行った。腫瘤はよく放射線に反応し，経過良好であったが，昭和47年5月26日局所再発を生じた。喉頭全摘を推めるも，以後外来通院せず詳細は不明である。

総 括 と 考 按

喉頭癌では，そのほとんどが扁平上皮癌で，佐藤⁴⁾が喉頭に腺癌がなぜ少ないかと疑問をなげかけている様に喉頭腺癌の経験は稀である。因みに，本邦では岡田²⁾，竹田⁵⁾，豊田⁶⁾の各1例，佐藤⁴⁾の3例が報告されているのみである。

喉頭部の正常粘膜は，声帯部では扁平上皮よりなり，これより発生する扁平上皮癌が圧倒的に多い。しかし，声門上部と下部は線毛円柱上皮よりなり，肺や上顎洞さらに子宮頸，稀には胃や腸など腺上皮領域にも扁平上皮癌の発生をみており，喉頭癌の場合も同様，円柱上皮細胞の扁平上皮化生による発癌も否定出来ない。

それにしても，子宮頸癌では腺癌が5%の頻度で発生することより考えて，喉頭癌においてももっと在来円柱上皮由来の腺癌が発生してよいと考えるが，実際には1%以下である。

喉頭腺癌の場合，組織発生学的に在来表層(被蓋)円柱上皮由来と粘膜下にみられる分泌腺由来が考えられる。現実には，喉頭腺癌の大部分は分泌腺由来の adenoid cystic carcinoma あるいは mucoepidermoid carcinoma と診断されるものが多く，唾液腺由来や気管分泌腺由来のものと同様の組織像を呈し，被蓋円柱上皮由来の腺癌の報告はほとんど見あたらない。

牛島⁷⁾の唾液腺腫瘍分類(図1)によると，adenoid cystic carcinoma と mucoepidermoid carcinoma は，組織発生学的に同じ管系

図1

より発生する腫瘍と云われている。現実には，腺管形成や粘液分泌像などその程度は種々で，両者の組織型には移行型もみられ明確に区別することが困難な例がある。また同一症例でも，その経過により組織像が変わることは，自験第2症例でも明白である。我々は，腫瘍が主導管由来の場合 mucoepidermoid carcinoma の像を呈しやすく，牛島も述べている様に末梢導管に発生すると，adenoid cystic carcinoma の組織型をとる傾向があると思われる。

組織学的に，小さい生検材料および初期癌では良悪性の診断は必ずしも容易でなく，組織型も経時的に変化するものもある。また，悪性と診断してもその程度は極めて low malignancy のものから high malignancy のものまであり，その診断と治療には十分な配慮が必要である。

Jan Olofsson⁸⁾によると，喉頭より発生した adenoid cystic carcinoma は64例報告されており，これらの腫瘍の大部分は声門上部や

下部より発生している。臨床的に、本腫瘍の発育は緩慢なものもあり、周囲組織にびまん性に浸潤する。このことが臨床診断を困難にしている一因と考える。最近は、本症例に対しても、術前、術後照射 (3500~4000 rad) が有用であると報告されているが、一般的にこの種の組織型は放射線感受性が低いと考えられているため、手術療法が優先される。

組織学的に、被蓋円柱上皮は健在でも、粘膜下組織をあらゆる方向に浸潤性増殖傾向が強い

ため、浸潤範囲の決定は肉眼的には非常に難しい。我々の第 1 症例の摘出喉頭を病理組織学的に検討したところ、腫瘍は気管側断端部まで粘膜下に浸潤しており、術中の迅速病理組織検査の必要性を痛感した。そのため手術中、切断端を精査し、浸潤の有無を検し、周囲組織を含めて広汎な局所切除と併せて頸部リンパ節廓清を行うことが本腫瘍の手術にとって特に重要である。

ま と め

1) 我々は、喉頭腺癌 3 例を報告した。その組織像は、adenoid cystic carcinoma 1 例 (70 才女性) と mucoepidermoid carcinoma 2 例 (64 才, 男性, 45 才, 男性) である。

2) adenoid cystic carcinoma と mucoepidermoid carcinoma は、組織発生学的に同じ管系より発生し、両者の移行型もみられる。我々は、腫瘍が主導管由来の場合 mucoepidermoid carcinoma の像を呈し、腺房近くの末梢導管に発生すると adenoid cystic carcinoma の像を呈する傾向が強いと考えられる。

3) 治療は、本腫瘍の増殖形態が扁平上皮癌と異なり、粘膜下に広く浸潤し、また放射線抵抗性を有するため手術療法が優先される。切除範囲を肉眼的に決定するのは難しく、術中断端の迅速病理組織検査を行って切除範囲を決定することが、局所再発予防の上からも大切である。

参 文 考 献

- 1) Olofsson, J. and A. W. P. van Nostrand: Adenoid Cystic Carcinoma of the Larynx: A Report of Four Cases and a Review of the Literature. Cancer 40: 1307~1313, 1977.
- 2) 岡田和一郎: 喉頭腺癌腫について。日耳鼻 11: 172~183, 1905.
- 3) 佐藤武男, 他: 喉頭 Adenocystic Carcinoma の一症例。耳喉 34: 493~496, 1962.
- 4) 佐藤武男, 他: 喉頭腺癌 3 例—喉頭に腺癌はなぜ少ないか—。耳喉 48: 49~54, 1976.
- 5) 竹田千里, 編: 頭頸部腫瘍図譜。中山書店, 東京, 1975.
- 6) 豊田弥八郎, 他: 頭頸部 adenoid cystic carcinoma の臨床像。耳喉 47: 45~50, 1975.
- 7) 牛島 有: 唾液腺腫瘍, 3—12, 文光堂, 東京, 1974.

原稿到着: 昭和52年12月20日

別刷請求先: 小池聰之

〒790 松山市堀ノ内13

国立松山病院耳鼻咽喉科

写 真 説 明

第 1 症例

- 1). 生検時の組織像
- 2). 全摘材料及びその浸潤範囲 (斜線の部)
- 3). 矢状断面 (断端まで腫瘍の浸潤を認める)
- 4). 手術材料の組織像 (弱拡大)
粘膜被蓋円柱上皮は残存し、粘膜下にびまん性浸潤をみる adenoid cystic carcinoma
- 5). 一部強拡大
- 6). 甲状軟骨 (中央) の前後壁にびまん性に浸潤する癌組織

第 2 症例

- 7). 生検標本 (未分化扁平上皮癌様組織)
- 8). 旁気管リンパ節転移 (mucoepidermoid carcinoma の像を呈す)
- 9). 剖検時の喉頭領域 (腫瘍は不明瞭だがびまん性に硬化、肥厚し内腔の狭窄をみる)
- 10). 喉頭原発部の組織 (生検と同様、未分化扁平上皮癌様の組織像を呈す)
- 11). 胸骨転移巣で、mucoepidermoid carcinoma の像
- 12). 後腹膜リンパ節転移癌で mucous carcinoma の像に富む